

民鉄文化の伝承と発信

「民営鉄道の博物館・資料館——その使命と役割——」

膨大な資料で

中京圏の鉄道史を伝える。

名鉄資料館

名鉄資料館は名古屋鉄道100周年を記念して1994年に開設された。名古屋鉄道に関する貴重な資料を保存・管理し、鉄道史のみならず中京圏の産業史も俯瞰できる場所となっている。企業博物館ではあるが、社会貢献活動の一環として、資料公開にも対応している。情報提供という形での地域貢献について、鉄道事業本部計画部の脇本裕司業務教育課長に伺った。

文◎茶木 環／撮影◎加藤有紀



第1展示室。明治時代からの資料や書類など貴重な品々がショーケースに展示されている。



1927(昭和2)年に昭和天皇御列車を運行。[御召列車に関する展示]や「御召列車運転記念メダル」、当時のダイヤや社内報などが置る。

出征する社員に贈られた「日の丸」。戦時中のヒトコマ漫画なども展示されている。



岐阜県可児市川合北 2-158

- 最寄り駅 名鉄広見線 日本ライン今渡駅 (徒歩 25 分)
- 開館時間 10:00 ~ 17:00
- 休館日 土・日曜日、祝日・年末年始
- 入館料 無料 ※事前予約制

資料の保存・管理を目的に開設

1994年は名鉄のルーツである愛知馬車鉄道の創立100周年となる節目の年に当たる。その数年前に実施された社内アンケートなどの結果から、周年記念事業は資料館建設に決まった。

「当社の資料は、昭和30年代に社史編纂のため、社内各部署に分散していた資料を本社に一元化して保管していたが、その後は、さまざまな部署で資料が収集・保管されていった。そうした現状にあつて、貴重な資料を体系的に保存・管理して有効に活用しよう」と、資料館建設案が挙げられた」と鉄道事業本部計画部の脇本裕司業務教育課長は経緯を語る。

名鉄資料館は、基本的に資料を整理して保存・管理することが目的だが、名鉄教習所の敷地内にあることから、従業員の教育においても活用されている。毎年4、5月になると、新入社員が資料館の見学に訪れて名鉄の歴史を勉強しているという。名鉄の関係者でなくとも、事前に予約の上、見学が可能だ。来館者は年間2000人、うち8割が一般の希望者で、特に宣伝もしていない中でこの比率は、鉄道の歴史や資料への関心の高さがうかがえる。

各部署や個人から寄せられた資料

名鉄資料館のベースとなる資料は、



名古屋鉄道株式会社
鉄道事業本部 計画部
業務教育課長兼教習所所長

脇本裕司

Hiroshi WAKIMOTO

本社で保管していた社史編纂資料だが、開館に当たってはグループ企業を含め各所に資料提供を呼び掛けた。

「社史編纂の際に、創業に関わった方々の親族などから文書類を借り、その返却に当たって『そのまま保管してほしい』と言われたものも、資料館に移設した。乗車券などは、山のように集まった」(脇本課長)という。

OBをはじめ、個人で所有していた貴重な資料も多い。写真を中心に、社章や社報、パンフレットやポスター、制服など。中には戦前の辞令や給与が記された書類などもあり、名鉄を支えてきた多くの社員の素顔や生活が垣間見え、その蓄積の重みを感じられる。

道具や機械類、廃線になった路線の使われなくなった駅名標や行先表示なども、資料として資料館に納められた。

常設展示は2室からなり、第1展示室には、名鉄124年の歴史をたどる乗車券や路線図、『愛知県馬車鉄道の敷設許可願』など、主に文書類が展示されている。全国の鉄道沿線案内図など約1600点の鳥瞰図を描いた吉田初三郎の作品や、1961年に登場したパノラマカーの先頭に付けられてい

民鉄文化の伝承と発信

[民営鉄道の博物館・資料館 — その使命と役割 —]



CTC制御盤。平成元年まで小牧駅に設置されていた。上に展示されている案内表示装置は、左が太田川駅、右が犬山駅に設置されていた。



歴代の制服。女性の制服も展示されている。



第2展示室。名鉄の歴史を物語る駅名標やヘッドマークなど鉄道用具機器が所狭しと並べられている。

— 名鉄のオープン・エア・ミュージアム — 陸蒸気がいまでも走る 博物館明治村

「博物館明治村」は、愛知県犬山市にある野外博物館で、1965年に開村した。明治時代を中心とした60件を超える歴史的建造物を移築・保存、うち11件は国の重要文化財に指定されている。村内では、日本最古級の蒸気機関車・路面電車の体験乗車が楽しめる。



愛知県犬山市字内山1番地

法人名称：公益財団法人明治村

- 最寄り駅 名鉄犬山線 犬山駅（明治村行きバス終点）
- 開村時間 9：30～17：00（季節・イベントにより変動あり）
- 休村日 7/25～9/5の毎週火曜日（8/14を除く）ほか（要確認）
- 入村料 小・中学生600円、高校生1,000円、大学生・65歳以上1,300円、大人1,700円



パノラマカーの先頭部に付いていた行先種別表示板。電動式、白帯特急車の2種を展示している。

第2展示室のジオラマでは、すでに引退した名鉄の鉄道模型が走行する。



明治・大正期から昭和10年代にかけての乗車券。

たエンブレムなども第1展示室に展示されている。

第2展示室には、土木・車両・電気・運転などに関連する機械類を展示。路線開業時に欧米から輸入していたレールのコレクション、タブレット閉塞機、旧型電車に設置されていた主幹制御器や往年の列車のヘッドマークなどが展示されている。

展示点数は合計で1500点ほどだが、収集点数は非常に多く、現時点で整理が終わっているものだけでも3万5000点に及ぶという。資料館職員が、それらの整理やデータ化を進めている。古い書類をスキャニングするデータ化はかなりの苦勞を伴うが、寄贈者の名前も記載して、展示の際には寄贈者名も併せて明示している。

アーカイブとして資料を保存・管理する名鉄資料館のもう一つの役割に、情報提供がある。社内外から寄せられる名鉄に関する問い合わせに対応している。例を挙げれば、社内からは「記念乗車券用を使用する写真はないか」。外部からは「郷土資料館で開催する鉄道展に写真や情報を提供してもらいたい」など、あらゆる分野からの要望が届く。こうした問い合わせには、時に調査を行いながら資料を提供し、丁寧な対応を行っている。

「鉄道会社は地域に支えられている。必要とあればきちんとした情報を提供する。それが名鉄資料館が担う地域貢献」だと協本課長は語る。

中京圏の産業の歴史を伝える

名鉄の歴史は地域の鉄道の合併で成り立っている。1935年に愛知電気鉄道と名岐鉄道が合併、その後、瀬戸電気鉄道・竹鼻鉄道・三河鉄道など、愛知・岐阜両県の中小民鉄各社が合併しながら、現在の名鉄の長大な路線網が構築されてきた。

「現在のお客さまの中には名鉄の歴史を知らずに利用されている方もいる。しかし、中京圏には古くから産業都市が集積し、材料や部品、製品を運ぶことで港湾や鉄道が整備され、発達してきた。つまり中京圏の鉄道は産業があつてこそ発展し、産業も鉄道があつてこそ発展してきたという歴史がある」（協本課長）

基本的には大きく展示を変えることはないが、各路線の周年記念などには特別展を開催している。「名鉄の電気機関車『デキ』写真展」「伊勢湾台風と名鉄電車」「犬山線開通100周年記念展」など年に1、2回ほどのペースで開催、調査活動を行う。

「名鉄資料館は社史とはまた別の意味の生きた資料や情報を所有している。今後も資料を収集し、維持管理して、地域に役立てる資料館でありたい」と協本課長は今後について語る。

多彩な資料の数々が語る名鉄の歴史と中京圏の鉄道史と産業史。膨大な資料の中に潜在する歴史や物語はまだ多く、今後も語られ続けていくだろう。